北海道の印刷出版文化情報誌
季刊アイワード
Quarterly WORD
クォータリーアイワード

2024年7月
第22号（通巻368号）

THIS IS MECENAT 2024

特集

障害者と共に学びのユニバーサルデザインを考える
——北海道大学から始まった修学支援懇話会

シリーズ「北海道のジオパーク」❻ …… 白滝ジオパーク〔遠軽町〕

ほっかいどうの本 ……『北海道絶滅動物館』 …… 北海道新聞社
『ほっかいどう地酒ラベルグラフィティー』 …… 亜璃西社
『嗚呼、メレヨン島　柿本胤二画集』 …… 共同文化社

特集

障害者と共に学びのユニバーサルデザインを考える

――北海道大学から始まった修学支援懇話会

日本学生支援機構が2022年度に実施した、障害のある学生への修学支援に関する調査結果によると、全国の大学など高等教育機関に在籍する学生の1.53%、約5万人が何らかの障害を抱え、このうち約2万7千人が学校側から授業などで配慮や支援を受けています。割合としてはわずかですが増加傾向にあり、このような学生の修学環境を整えることは、健常な学生がけがや病気をした際にも学びやすい環境となります。北海道大学(以下、北大)の教職員や障害のある学生が集まり、2012年3月に発足した「修学支援懇話会」では、教科書など書物を扱うことや読むことが困難な「プリント・ディスアビリティ」のある学生への支援の在り方など、「学びのユニバーサルデザイン化」について長年話し合われています。現在は有志の勉強会として継続している懇話会が始まったきっかけや意義などについて、北大大学院教育学研究院の松田康子教授、プリント・ディスアビリティ当事者でもある村松哲夫さん、北大附属図書館利用支援課の小林泰名係長らに話を聞きました。

(文・写真／片山健一　取材日2024年6月3、8日)

オンラインで開かれる修学支援懇話会

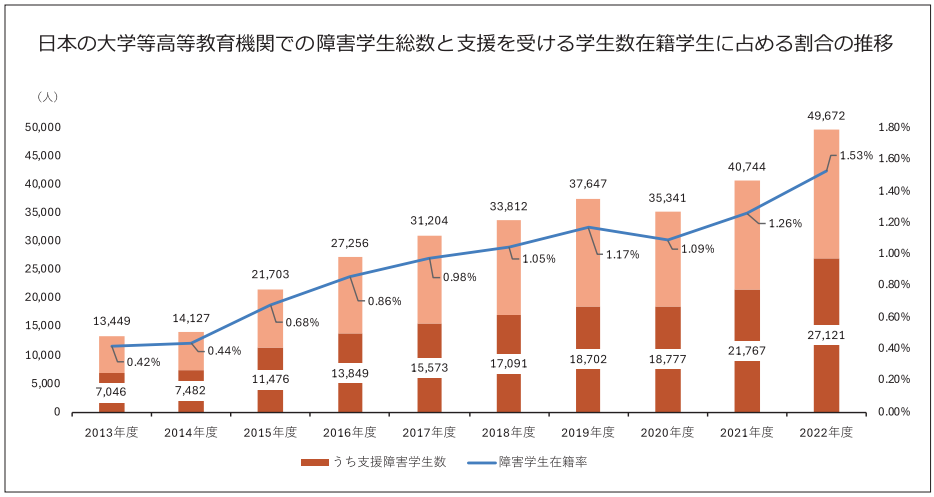
障害学生支援に欠かせない文献の電子化

障害のある人から意思表示があった場合、負担が過重にならない範囲で、バリアを取り除くために必要な対応をする「合理的配慮」の提供を行政機関などに義務付けた「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」が2016年4月に施行となりました。2024年4月からは同法の改正により、全ての事業者に合理的配慮の提供が義務化されています。

2013年6月の同法成立に備えて、北大は事務局学生支援課内に特別修学支援室（現・アクセシビリティ支援室）を同年4月に設置しました。同室は、障害のある学生が、学修や研究を行う上での制約や負担を軽減するための合理的配慮を受けられるようサポートをしています。

初期の懇話会から参加している
北大附属図書館の小林さん

修学支援懇話会を主催する
北大大学院教育学研究院の松田教授



日本学生支援機構の障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書を基に作成

プリント・ディスアビリティのある人が
どうしたら助かるのかを発信し続ける村松さん

大学が行う合理的配慮の例としては、教室に車椅子専用のスペースを確保したり、パソコンの持ち込みを認めたり、試験時間の延長や回答方法を配慮したり、先生が話す内容をリアルタイムで文字化し障害学生に伝える「ノートテイク」などがあります。教材や文献の文字データ化もその一つです。

視力や視野などに問題を抱える視覚障害だけでなく、発達障害や失語症、肢体不自由で本のページをめくれないといった理由で、通常の印刷物を扱ったり読んだりすることが困難な状態を「プリント・ディスアビリティ」といいます。

2010年1月の改正著作権法の施行により、図書館では、視覚による認識が困難な人に対して文字データ、音声データなどの電子版を作成し、提供できるようになりました。さらに同年2月の「図書館の障害者サービスにおける著作権法第37条第3項に基づく著作物の複製等に関するガイドライン」によって、肢体不自由など視覚に障害がない人も含め、プリント・ディスアビリティのある全ての人に対しても電子データを提供する道が開かれました。松田さんは「障害学生の情報保障として、文献の電子化は欠かせない支援の一つになっています」と言います。

修学支援懇話会で議論が深まる

北大附属図書館が、プリント・ディスアビリティのある学生への情報保障サービスの検討を始めたのは、2012年2月からです。北大の准教授だった松田さんが、四肢麻痺により車椅子で通学する大学院生の村松さんに聞き取り調査を行う中で、大学に対する要望を尋ねた時、本のページをめくることが困難な村松さんは「大学の蔵書を全部電子化してほしい」と答えたそうです。すぐに希望をかなえることはできなくても、「話を聞くだけで終わらせてはいけない」と松田さんは図書館を訪ね、文献電子化の話題を持ちかけました。「当時の部長が理解を示してくれて、すぐに検討を指示してくれたおかげで」（松田さん）、同年3月に初めての「修学支援懇話会」が開かれました。

図書館の大会議室に集まったのは、松田さん、村松さんと図書館職員、学生支援課職員です。1996年に北大に入学した村松さんは「文学部だったので読書は殊更欠かせないのですが、それが一番大変でした。プリント・ディスアビリティという言葉を知らない中、どうしたら本がたくさん読めるのか、『できないことを嘆くよりも、できる方法を見つけよう』と暗中模索する大学、大学院生活でした」と振り返ります。

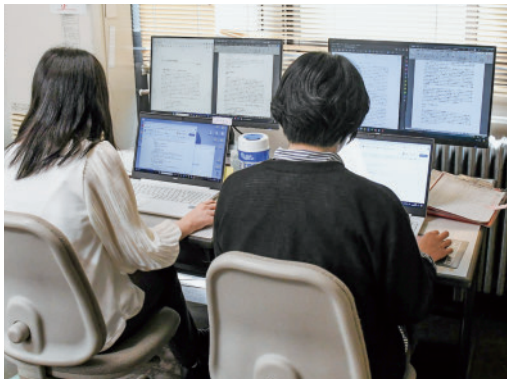
情報通信技術の進展は、村松さんの読書方法にドラスティックな変化をもたらしました。個人で紙の本や資料を電子化する〝自炊〟により、文字データをタブレットPCで読むようになり、「感覚的にはこれまでの10分の1程度に負荷が軽減された」そうです。「〝自炊〟では購入できる本の数や労力に限界があるので、図書館の皆さんが協力してくれれば、非常に助かると思いました」（村松さん）。

懇話会は毎月のように開かれ、発足から約半年後には印刷会社、学内でノートテイク講習を担当する教員も加わって、情報保障の基本的な考え方、法律面や技術面など、より多角的な意見が交されるようになりました。懇話会を通じて、紙資料の電子化や電子書籍の導入は視覚障害者だけでなく、他の障害者にも有効な情報保障で、大きな助けになるという認識が浸透していきました。

附属図書館で資料電子化サービスを開始

附属図書館の主催により、2014年3月までの2年間で21回にわたり

複合機のスキャナーで本を画像データとして読み込む（北大附属図書館北図書館事務室）


文字データを確認していく校正作業（北大附属図書館北図書館事務室）

開催された懇話会で話し合いを積み重ね、「プリント・ディスアビリティのある利用者のための資料電子化サービス」が誕生しました。このサービスは、紙の本などを読むことが難しい学生の要望に応じて、図書館の資料を電子化（画像PDF化、文字データ化）するものです。2014年9月からの試行を経て、2016年4月に正式にサービスを始めました。近年は年間100件程度の依頼があり、サービス開始から2023年度までの累計依頼数は829件に上ります。

資料電子化の流れは、サービスの希望者がプリント・ディスアビリティであることをアクセシビリティ支援室が確認した上で、図書館に電子化サービスの利用申請をします。図書館は、利用者が求める資料の所蔵を確認し、電子書籍や電子ジャーナル（学術雑誌）があれば利用者に情報提供します。さらに、視覚障害者等用に作成された電子データの有無を確認します。いずれも無い時は、出版者に本文データの提供を依頼することもあります。

電子書籍や電子ジャーナル、電子データのいずれも入手できない場合は、図書館職員らの手作業で電子化を行います。文献をスキャナーで読み取り、PDFデータにしてからOCR（光学式文字認識）ソフトを使って文字データ化し、データを校正して、利用者の要望に応じた形式で提供する――という作業工程を踏みます。校正済みの文字データは、依頼から約1カ月半～2カ月後に利用者に提供されます。

文献をスキャナーで読み取る作業は図書館の職員が行い、最も時間がかかる校正作業は主に支援室から派遣される支援学生（ピアサポーター）が情報保障の担い手として研修を受けた上で業務に当たります。支援学生は大学の非常勤職員として雇用され、2024年4月時点では22人が登録されています。多くの人手を要するため、300ページの文献を電子化するには1冊3万円前後のコストがかかります。

このデータ化等の作業が重複することを省くため、図書館間で相互利用の体制ができています。国立国会図書館では自館で製作、または他機関から収集した視覚障害者等用データを提供しています。また、大学図書館間でも各館の作成した資料の情報を共有しています。

北大では6万4千タイトルの電子書籍と2万2千タイトルの電子ジャーナルが利用できます。しかし、健常の学生が当たり前に利用している北大所蔵の370万冊を超える紙の本などを、プリント・ディスアビリティの学生が読むことは困難です。「図書館で電子化しているだけでは格差は埋まりません。出版者がプリント・ディスアビリティのある読者にも読める形式で電子書籍を出版したり、プリント・ディスアビリティのある読者の求めに応じて電子データを提供することが、多様な読者の自由な読書や学びの機会の拡大につながると思います」と小林さんは強調します。

附属図書館の施設・設備面の対応も進みました。車椅子利用者がエレベーターをバックでも降りやすくするための鏡を設置し、ホームページには障害者向けページを新設しました。

修学支援懇話会の歩み

□修学支援懇話会　■北大

年	月	内　容
2010	1	改正著作権法施行
	2	図書館の障害者サービスにおける著作権法第37条第3項に基づく著作物の複製等に関するガイドライン策定
2012	3	修学支援懇話会発足
	6	附属図書館のエレベーター内にミラー設置
2013	4	北大特別修学支援室発足（障害学生支援部署）
	6	障害者差別解消法公布
2014	1	国立国会図書館視覚障害者等用データ送信サービス開始
	2	附属図書館ホームページに障害者向け利用案内ページ公開
	4	修学支援懇話会開催の主体を附属図書館から特別修学支援室に移す
	9	附属図書館の「プリント・ディスアビリティのための資料電子化サービス」試行開始
2015	4	資料電子化作業に特別修学支援室のサポート学生が派遣される
2016	4	附属図書館の「プリントディスアビリティのための資料電子化サービス」正式にサービス開始
		障害者差別解消法施行
2017	4	修学支援懇話会の開催の主体を特別修学支援室から松田先生に移す
2019	6	読書バリアフリー法施行
2022	10	国立情報学研究所読書バリアフリー資料メタデータ共有システム本運用開始
2024	1	国立国会図書館「みなサーチ」正式版公開
	4	改正障害者差別解消法施行

障害者が学びやすい環境整備は続く

２０１４年３月まで図書館が主催していた修学支援懇話会ですが、同年４月からは特別修学支援室の主催となりました。図書館だけでなく、施設部など多様な部署の教職員や学生が集まって意見交換をして、障害者の目線によるバリアフリーマップの作成における留意点が話題になったり、雪かきによる体力づくりの観点から冬季の車椅子による構内移動のための雪かきバイトが話題になったりと、２０１７年３月までの３年間で11回開かれました。松田さんが支援室の相談員を離れた２０１７年４月以降は松田さん個人が主催し、有志30人ほどの研究会として、年２回のペースで継続しています。

懇話会を裏で支える学生たち

２０２４年６月８日午後２時、第45回の修学支援懇話会が始まりました。２０２０年12月以降の懇話会はオンラインで行われるようになり、この日の参加者13人のほとんどはＷｅｂ会議ツールの「Ｚｏｏｍ」を利用して参加しました。「ろう者が手話で司会を務めるオンライン会議、どう進めるのか興味ありませんか？そういうチャレンジがあるのも懇話会の魅力の一つです」（小林さん）。

北大で手話とろう文化・教育の歴史について講義を担当するろう者の教員が懇話会に参加するため、手話通訳に加えて、音声認識と自動翻訳を活用して会話をリアルタイムで〝見える化〟できるアプリ「ＵＤトーク」を使用します。音声認識の変換ミスなどをすぐに訂正できるよう、裏方スタッフとして学生３人が別室でパソコンに向かっていました。

発言内容は音声のほか、ＵＤトークで文字でも共有されます。図書館職員のほか、アクセシビリティ支援室スタッフ、大学非常勤講師、卒業生らそれぞれが自己紹介した後、小林さんから障害者が利用しやすい形式の資料を探すことができる国立国会図書館の検索システム「みなサーチ」や、点字・音声図書が豊富な「サピエ図書館」などの利用方法について紹介され、意見交換をしました。「電子化には待ち時間が発生する。すぐに読めるようになればいいな」「通う大学によって受けられるサービスが違うのは残念」といった意見や感想が参加者から出てきました。

懇話会が終了した後も、何人かの参加者は時間の許す範囲でオンラインに残って、雑談が続きます。その間、松田さんは、Ｚｏｏｍをつないだままにして、〝ゆるいけど熱い〟対話を見守ります。

対話を通して解決策を見いだす

政府は、社会的なバリアを取り除くために必要な合理的配慮の提供に当たって、事業者と障害のある人との間で対話を重ね、共に解決策を検討する「建設的対話」が重要と強調しています。

修学支援懇話会では十数年前から、障害のある学生と大学教職員が「建設的対話」を繰り返し、「合理的配慮をする方も、求める方も、まだまだ理解は十分ではない中、お互いの落としどころを探る、コンセンサスの形成の場となった」と村松さんは述懐します。

松田さんは「障害者差別解消法が施行される以前に、米国マサチューセッツ大学アマースト校のディスアビリティサービスセンターの存在を知り、北大にもこんなセンターができたらと夢見ました。今は障害学生支援組織の設置・運営は大学の義務になりましたが、その前から続けてきた修学支援懇話会での学びと経験は、教育の担い手としての自分を支えています」と懇話会の意義を語ります。

既に博士後期課程を終えた村松さんは「懇話会の中で初めて、自分でも無意識だったバリアに気付くこともありました。出入り口のスロープの設置などを含め、大学はきちんと対応してくれましたが、技術の進歩に合わせて修学支援をアップグレードしてもらえるよう、これからも懇話会に参加し続けていきたいですね」と話します。

村松さん入学後、指導教官の尽力もあり設置されたクラーク会館（学生会館）のスロープ

北海道のジオパーク⑥【最終回】

白滝ジオパーク

〔遠軽町〕

（文と写真・良知貢一　取材日2024年5月29日）

光り輝く天然のガラス

遠軽町白滝には約220万年前の火山活動で誕生した膨大な黒曜石が眠っています。「天然のガラス」である黒曜石は古くから人々の生活に欠かせない道具として利用されてきました。およそ3万年から1万5千年前、後期旧石器時代には、この地で黒曜石を加工してナイフや槍の先端などの石器を、1万年以上にわたり作り続けていました。

黒曜石は、粘性の高い溶岩が急速に冷え固まってできるガラス質の火山岩で、鋭い断面に加工しやすいため古くから刃物や狩猟具などに使われてきました。白滝市街の北にある標高1147メートルの「赤石山」一帯は黒曜石の一大産地として知られ、その埋蔵量は推定約2～5億トンと日本最大規模です。この地域は約300万年前に大噴火が発生し、直径5キロに及ぶ「幌加湧別カルデラ」が形成されました。約220万年前には、カルデラ内の10カ所から噴出した溶岩の表面に近い部分が冷えて固まり、黒曜石となって地表に現れています。白滝のように原石が地表に露出して採取が容易な場所は国内でも非常に希少なことなどから、2010年に日本ジオパークに認定されました。

黒曜石を作った痕跡が地表に現れる八号沢露頭
（写真提供：白滝ジオパーク推進協議会）

国宝の石器類が展示されている遠軽町埋蔵文化財センター

古代人の息吹が込められた黒曜石

赤石山を取り囲むように100カ所余り発見されている遺跡で、古代の人々が黒曜石を利用した痕跡を見ることができます。国内でも珍しい後期旧石器時代のものであることから1989年に「白滝遺跡」として国の史跡に指定されました。さらに1995～2008年の高速道路の建設工事に伴う調査では、約768万点、重量11・8トンに及ぶ膨大な石器類や黒曜石の破片が出土しました。遠軽町埋蔵文化財センターの松村愉文館長は「小さな破片を丹念に調べることで石器の作製過程が分かりました」と話します。破片を立体パズルのように組み合わせると、石器に利用された部分を除いた石の塊が再現できるそうです。

白滝産黒曜石の石器は道内全域にとどまらず、遠くサハリンや東北地方でも見つかっています。約1万5千年も前の人々が海を越えて、交易品として黒曜石を利用していたことは驚きです。

出土品の一つに、長さ36・2センチのときわ大きい石器があり、槍の先に使われていた尖頭器としては国内で最大級のものです。複数の破片の状態で見つかったことから「作製中に失敗して自暴自棄になって割ったのか、それとも狩り以外の用途で使用していたのか……」と松村館長は思いをはせます。

光り輝く白滝産黒曜石
（写真提供：白滝ジオパーク推進協議会）

日本最古の国宝に

2023年6月、白滝遺跡群から出土した石器類1965点が国内最古の国宝に指定され、石器の加工技術や作製過程が分かる資料として高い評価を受けました。多数の国宝は埋蔵文化財センターに展示されています。同年7月には日本で初めて「国際黒曜石会議」が遠軽町で開かれ、国内外から110人の研究者らが赤石山の産地を視察に訪れました。

埋蔵文化財センターでは、黒曜石から石器を作る体験活動を実施していて、専門スタッフの指導の下で自分だけの槍先やアクセサリーを作ることができます。同センターに併設される「白滝ジオパーク交流センター」では、地形の成り立ちなどを模型で分かりやすく展示しています。専門ガイドが同行して黒曜石の露頭を見学する「ジオツアー」は7月から10月まで開催します。松村館長は「白滝ジオパークの魅力を見て触れて体験してみてください」と呼び掛けています。

石器づくり体験の様子
（写真提供：白滝ジオパーク推進協議会）

ほっかいどうの本

このコーナーは北海道の出版社から発行された本を社員が読み紹介しております。お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。特記以外は税込価格です。

北海道絶滅動物館

978-4-86721-125-0
「北海道絶滅動物館」編集委員会　編／作画・構成　浩而魅諭
B5判　160頁　2750円
北海道新聞社　発行　011・210・5744

人類が生まれる遥か昔、地球上には多くの古生物が生息していました。地球の豊かな環境のなかでどのような暮らしをしていたのでしょうか。サッポロカイギュウのように絶滅したもの、現在のペンギンやカメの祖先のように環境変化に適応してきたもの、多種多様な生物の生活がそこにはありました。

本書は、その古生物の姿や形、生活環境をイラストも使いわかりやすく紹介しています。イラストは札幌在住のボールペン画家の浩而魅諭さんが、各地の博物館へ出かけ古生物の生活空間を観察し表現しています。

その昔、東アジアと陸つづきだった地形は何千万年の時を経て、ゆっくりと現在の北海道の姿となりました。大陸の動きとともに、なぜ北海道へ来たのか、何を食べて生活していたのか、そんな古生物の暮らしに想いを巡らせます。

北海道では多くの化石が発見されています。ひょっとすると、あなたの身近でもクビナガリュウが眠っているかもしれません。

（北海道営業部　中川信巳）

ほっかいどう地酒ラベルグラフィティー

978-4-906740-64-2
能登　亨樹　編著／和田　由美　監修
B5変型判　168頁　3300円
亜璃西社　発行　011・221・5396

北海道の地酒を思い浮かべた時に、あの酒はキレがあって美味しいとかコクがあるとか味についての蘊蓄はあっても、ラベル自体については意識しない人が多いのではないでしょうか？

本書は「Ⅰ 幻の地酒ラベル」「Ⅱ ラベルでたどる北の酒蔵」の二部構成で、レトロで格調高い北海道の蔵元のオリジナリティ溢れるラベルが数多く掲載されています。

幻の地酒ラベルの章では、今となっては希少価値の高いラベルを見ることができます。その時代の絵師や書家、印刷工によりデザインが工夫され、洗練された高いクオリティを感じさせます。また、ラベルでたどる北の酒蔵では、明治・大正期創業の蔵から平成・令和期に誕生した蔵まで、道内各地で操業している16軒の酒蔵の歩みが、ラベルの変遷と共に紹介されています。

北海道では豊かな水源で育まれたお米と伏流水や湧水により、美味しい地酒が造られています。本書のラベルを眺めながら好みの地酒を呑むと、さらに味わい深く、心が癒されることでしょう。

（枚葉印刷部　中垣　元）

嗚呼、メレヨン島 柿本胤二画集

978-4-87739-402-8
柿本　純　編
A4判　96頁　3520円
共同文化社　発行　011・251・8078

メレヨン島は南太平洋の小さな島（現ミクロネシア連邦ウォレアイ環礁）で、第二次世界大戦末期に補給が途絶え、守備隊の7割超が戦死や戦病死した悲劇の島として知られています。

本書は、同島に小隊長として出征され、多くの仲間を失いながらも終戦を迎え帰国することのできた柿本胤二氏が、自身の体験を描いた作品を中心に構成された画集です。

戦後、トヨタカローラ札幌の創業者となった柿本氏ですが、メレヨン島での悲劇がどうしても頭から離れず、80歳ころから戦争の記憶を題材として描き始めました。それを象徴するかのような作品が「蟻」です。飢えで息絶えた仲間が横たわっている。その仲間の口には蟻の行列。強く戦争の悲惨さを訴えかけています。

これら16点の他に、油彩やスケッチなどの作品も掲載され、アトリエの写真や自作の短歌なども収められています。戦後80年が迫るなか、多くの方に見ていただき、戦争の真実が後世に伝わることを願います。

（クリエイション部　藤野貴子）

新刊情報

書名の下の数字は日本図書コード（ISBN）及び雑誌コード。特記以外は税込価格。
お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。

北海道キャンプ場&コテージガイド 2024-25
978-4-86721-128-1
花岡　俊吾　著
A5変型判　336頁　1980円

北海道　大人の日帰りスポット 2024-25
978-4-86721-129-8
花岡　俊吾　著
A5変型判　288頁　1980円

エゾモモンガ　もも日和
978-4-86721-126-7
髙橋　賢悟　著
A5変型判　96頁　1650円

坂本先生とさわこの母
978-4-86721-131-1
坂本　勤・今　美幸　共著
A5変型判　224頁　1980円

北海道のスープカレー
978-4-86721-130-4
吉田　弥生　著
四六判　160頁　1540円

新　夏山ガイド6 道東・道北・増毛
978-4-86721-132-8
長谷川　哲　著
B6判　312頁　2640円

藤戸竹喜作品集 キムンカムイに導かれ
978-4-86721-133-5
「藤戸竹喜作品集」編集委員会　編
B5判　256頁　2500円

道新プラス 道新受験情報2025大学・短大特集
16747-05
北海道新聞社　編
B5判　256頁　990円

北海道新聞社
060-8711 札幌市中央区大通西3-6
011・210・5744

南原　繁「戦争」経験の政治学
978-4-8329-6896-7
川口　雄一　著
A5判　358頁　8800円

日本とイギリスの自然葬法
現代社会における死の物語の再編
978-4-8329-6894-3
宮澤　安紀　著
A5判　276頁　7480円

明治期北海道の兵士たち
徴兵・戦没・慰霊
978-4-8329-6897-4
相庭　達也　著
A5判　280頁　7700円

分断された世界をつなぐ思想
より善き公正な共生社会のために
978-4-8329-3419-1
山脇　直司　著
A5判　262頁　4400円

新版　北海道主要樹木図譜
978-4-8329-9143-9
宮部　金吾・工藤　祐舜　著／須崎　忠助　画
B5判　196頁　6600円

札幌農学校教授 ウィリアム・ペン・ブルックス
生涯とその時代
978-4-8329-6895-0
赤石　恵一　著
A5判　428頁　11000円

北海道大学出版会
060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
011・747・2308

ほっかいどう地酒ラベルグラフィティー
978-4-90674O-64-2
能登　亨樹　編著／和田　由美　監修
B5変型判　168頁　3300円

亜璃西社
060-8637 札幌市中央区南2条西5丁目
011・221・5396

おばけのマールとひみつのこうえん
978-4-89115-431-8
なかい　れい　え／けーたろう　ぶん
A4変型判　24頁　1320円

命を守る　防災ふろしき
978-4-89115-432-5
よこやま　よしえ　さく
A5判　32頁　1100円

北の行路
北海道の蒸気機関車　1970～75年冬
978-4-89115-433-2
小松原　一高　著
A4判　144頁　2860円

中西出版
007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
011・785・0737

子実トウモロコシ栽培マニュアル
978-4-86453-099-6
北海道子実コーン組合　監修
B5判　100頁　1980円

北海道協同組合通信社
060-0005 札幌市中央区北5条西14丁目
011・231・5261

敗者の明治維新と北海道移民、屯田兵
～東北諸藩の苦難の歴史～
978-4-8328-2401-0
北国　諒星　著
四六判　204頁　1760円

漆器からみるアイヌの社会と文化
978-4-8328-2402-7
浅倉　有子　編
B5判　265頁　6050円

豊島三右衛門　釧路地方地名考
978-4-8328-2403-4
秋葉　實　解読／三宅　正浩・戸部　千春　編
B5判　232頁　4950円

北海道出版企画センター
001-0018 札幌市北区北18条西6丁目2-47
011・737・1755

追憶のC62　ニセコ号
978-4-87739-403-5
古澤　成博　著
A4判　72頁　2750円

爪句@クイズ・ツーリズム
—鉄道編3
978-4-87739-404-2
青木　曲直　著
100×74ミリ　236頁　500円

直言　荒井聰の体験的政権交代論
978-4-87739-406-6
荒井　聰　著
四六判　304頁　1980円

読んで考える学校体育事故裁判
—教師が知っておきたい法的知識—
978-4-87739-408-0
山口　裕貴　編著
A5判　260頁　1980円

日常にある色　**色の自然誌**
978-4-87739-405-9
中井　和子　著
A5判　202頁　2200円

共同文化社
060-0033 札幌市中央区北3条東5丁目
011・251・8078

表紙のことば

初夏の姫沼
加藤　光浩
木版画　39・5センチ×41センチ

利尻島にある姫沼は、点在する小沼と湧き水を利用して作られた周囲約1キロの人造湖である。

一時期ヒメマスを放流したことから姫沼と名付けられた。

湖の周囲には、野鳥や植物を観察しながら歩ける木道が整備されており、晴れた日には湖面に「逆さ利尻富士」の絶景が見られる観光スポットとして知られている。

訪れた当初、利尻山は雲に隠れていたが、次第に雲が消え、「逆さ利尻富士」が現れた時の感動を作品にした。

GEM木版画会 会員　札幌市在住

※季刊アイワードのバックナンバーを
弊社ホームページよりご覧いただけます。
URL https://iword.co.jp

Quarterly IWORD
北海道の印刷出版文化情報誌［季刊アイワード］第22号（通巻368号）　2024年7月15日発行　編集■季刊アイワード編集委員会　発行■株式会社アイワード　〒060-0033 札幌市中央区北3条東5丁目5番地91　011・241・9341